

藝大通信

06
SEPTEMBER
2003

TOKYO
GEIDAI
東京芸大広報誌

特集 繼承と発展
日本の伝統をどのように生かすか
座談会「工芸」と「邦楽」の未来形
堀口光彦／増村紀一郎／野村四郎／山本泰正（邦山）
工芸の世紀を俯瞰する
「熊野」から「竹取」へ
開かれた大学 6 ワイマール・ Bauhaus 大学との交流展
学生のいる風景 6 東京芸大シンフォニア英國公演



「眠りの街」
(100D×100W×120H) テラコッタ・木
「東日本の現代作家彫刻展」優秀賞入選 (2002年)
「コンスタンチン・フランクーシ賞」奨励賞受賞 (2003年)

北郷 悟 (きたごう・さとる)

1953年福島県いわき市生まれ。
77年 東京造形大学彫刻科卒業。1979年東京芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。
87年 東京芸術大学非常勤講師 (～91年)。97年東京芸術大学美術学部助教授 (～現在)。
〈「眠りの街」〉は、都市に存在する過去から現在の積層された時間について表現した。現代の風のように流れる時間、過去からじみ出るように併む時間、二つの時間の狭間で行き交った人の意識とその空間性に「人々の存在」を感じることができる。「土」の持つ特質は、その時間性を持った素材として、焼成することでテラコッタの作品とした。(作者の言葉)

東京芸術大学広報誌 藝大通信第6号

編集発行 東京芸術大学広報委員会
編集委員 野田暉行 (副学長・音楽学部作曲科教授)
長谷部浩 (美術学部先端芸術表現科助教授)
渡邊健二 (音楽学部器楽科助教授)
太田和良幸 (事務局長)
アートディレクター 蓮見智幸 (美術学部デザイン科助教授)
制作 株式会社 平凡社
発行日 平成15年9月1日

お問い合わせ先
東京芸術大学総務課
〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8
電話 03-5685-7509 FAX 03-5685-7760
e-mail jkikaku@off.geidai.ac.jp URL http://www.geidai.ac.jp

第6号目次

3—11 特集 繙承と発展

日本の伝統をどのように生かすか

4—7 [座談会]「工芸」と「邦楽」の未来形

堀口光彦／増村紀一郎／野村四郎／山本泰正(邦山)

8—9 工芸の世紀を俯瞰する

「名作200余点でたどる『工芸の世紀』明治の置物から現代のアートまで」展の意義 戸津圭之介

10—11 「熊野」から「竹取」へ

邦楽総合アンサンブル研究の試み 三浦正義(望月太喜雄)

12—13 NEWS 2003.4～2003.7

美術研究科先端芸術専攻修士課程設置 桂英史

14—15 タイムカプセルに乗った芸大

【第6回】1951～1960年
佐藤道信〈東京芸術大学美術学部1951年〉
瀧井敬子〈東京芸術大学音楽学部1956年〉

16—17 開かれた大学⑥

マイマール・バウハウス大学との交流展
「グリーンスペース」を移植する 井村彰

18—19 学生のいる風景⑥

東京芸大シンフォニア英國公演
芸大の素晴らしさを再認識した旅 佐藤卓史

20—23 芸大短信 2003.9～2004.3

秋の大学美術館
「仏を観る」展／世界の陶芸—交流授業／
「しあわせのデザイン」展

22—23 秋の奏楽堂

ピアノシリーズ2003 プロコフィエフ没後50年

藝大通信

No.06

TOKYO GEIDAI

東京芸術大学広報誌

東京芸術大学広報誌

第6号刊行にあたって

芸大は規模そのものは決して大きな大学ではありません。しかし切り口によって実に多様な局面を見せる多面性を持った大学であり、ある意味で大学という既成概念を超えた、計測不可能な奥行きを持つ大学と言えるかもしれません。

この芸大通信では、それをできる限りわかりやすい形でお伝えしようと努力しております。しかし、言葉と写真等ではなかなか表現できないものがあるのも事実です。

これまでの特集では、主として芸大を縦軸の方向に切る形で組んでまいりました。今回は少し趣を変え、横軸の方向と言えばよいでしょうか、芸大の持つ内面的な宿命ともいべき「伝統」と「現代」に焦点を当て、その相克、その可能性について、学内のスタッフが語ります。もとよりこの小冊子すべてを語るわけにはまいりませんが、常にその問題に直面している達人たちの問題提起は、一つの象徴として大きな意味を持つものと思います。

伝統の継承と、時代の欲求。その縦断的出会いがもたらす新しい世界。芸大でならではのその追求は永遠に止むことがありません。

藝大通信編集委員長
副学長（企画担当）
野田暉行

特集

継承と発展

日本の伝統をどのように生かすか

歴史と文化に裏打ちされた
「技術」の継承。
個人から個人に伝えられ、
発展してゆく「芸」の世界。
教官座談会と、
新しい試みの紹介から
「工芸」と「邦楽」という
私たちの大切な財産を
守り、育て、広めていく
二つの学科に光をあてる。



「座談会」

「工芸」と「邦楽」の未来形

堀口光彦
美術学部工芸科彫金研究室教授

増村紀一郎
美術学部工芸科漆芸研究室教授

野村四郎
音楽学部邦楽科(尺八)教授

美術学部工芸科、音楽学部邦楽科の四人の教官が伝統文化を継承し、
将来の発展につなげるうえで東京芸大が果たすべき役割について語る。



芸術教育と徒弟制度

司会 東京芸術大学における伝統の継承とその発展というテーマで今日はお話を伺えればと思っています。美術学校、音楽学校に遡る芸術大学の歴史のなかで、特に工芸と邦楽という日本の伝統を継承していく学科で教育・創作・研究に携わっている立場から、最初に教育の現場で学生に接するにあたってのさまざまな課題についてお聞かせいただければと思います。

増村 学生に対してわれわれ教官ができるることは二つあると思うんです。一つは、手を添えて教えるという形、もう一つは己の背中を見せる、すなわち自分の仕事ぶりを見せるというふたつの側面があると思います。そのふたつを軸にして、具体的にどうするかということだと思います。

堀口 何をもつて伝統とするかという、一種の時代認識も必要だと思うんですね。どの時代のものを中心にはけて、現代にそれを生かしていくかという問題点があります。それからもう一つ、私の扱っている金属の分野に関していますと、絶えずその時代での最先端の技術を使つたという歴史があります。弥生時代から日本に金工は存在したようなのですが、その時代にあって金属を扱う技術は、ハイテクなわけですね。現代といえども新しい金属、新しい素材として続々といろいろな合金が出てきていますし、それに従つていろいろな技術が出てきている。伝統であると同時に、絶えずその時代の最先端にいなければいけないという認識を学生に持つてほしいと思うのです。



堀口光彦

ほりぐち・みつひこ

美術学部工芸科彫金研究室教授
1939年山梨県生まれ。
66年東京芸術大学大学院彫金専攻修了。
東京芸術大学美術学部工芸科彫金研究室
副手、非常勤講師を経て76年東京芸術大
学美術学部工芸科助手、86年講師、
90年助教授。94年より現職。

野村 邦楽の教育というのは、伝統的には徒弟制度が主軸になっていますよね。私もそういう体験者のひとりなんですが、私は芸大に来てから、大学の空氣と徒弟制度が合致できるかということを模索したわけです。徒弟制度には、理屈抜きみたいなところがあるんです。大学ではそれにいかに理論的な裏づけをしていくかということが、教育のいちばん大事なところじゃないかなと思っています。

野村 邦楽の教育というのは、伝統的には徒弟制度が主軸になっていますよね。私もそういう体験者のひとりなんですが、私は芸大に来てから、大学の空氣と徒弟制度が合致できるかということを模索したわけです。徒弟制度には、理屈抜きみたいなところがあるんです。大学ではそれにいかに理論的な裏づけをしていくかということが、教育のいちばん大事なところじやないかなと思っています。

山本 徒弟制度と芸大の教育に関していえば、代々自分たちが邦楽一家なのですが、私自身はただ音楽というよりも尺八が好きで始めたものですから。京都の大学を出たあと小さな音楽学校で理論を学んで、ごく自然に芸大に来られたような気がします。

野村 私もそういう意味では、内弟子修業をした人間ですからとまどいも多かったんですけど、若いころ、いわゆる徒弟制度に対する疑問を持っていましたので、新しい教育方法というんでしようか、メソッドを新たに考へなきやならないと思うし、ただ教えるというのではなくて、学生と一緒に能というものを考えていく感じで、いかど、研究を共にやつていこうという姿勢ではやつて思っています。

おるのですけど。

増村 工芸の場合、徒弟制度のわかりやすい例とすれば、 目で見て覚えることです。父が漆をやっていましたから、 家が漆の家庭になつております。ですから、家族の一員 うかとか、どのような作業をしているかということは、 それは、目で見て、体がそこへ自然に動くのでしよう。 このようななかたちの徒弟制度を芸大のなかで重ねるとい うのは難しい。高等学校まで普通の勉強をして、漆を全く見たことのない人がこの学校に入つてくるわけですか ら、その学生に対しどのように教育していくかを考え なければならない。授業というかたちで自分の仕事（実 技）を見せる。漆が持つている歴史だと、日本を代表 する工芸の仕事であるということを認識させることが重 要だと思います。

堀口 私の場合、お三方とは違つて、ここへ来て初めて 金属に触れたという立場から見ると、徒弟制度について は何の経験もないんですけども、ただ今先生方がお つしやつたようなものをどこで吸収していったかという と、自分の周りの学生からなのです。自分の同級生であ り、下級生であり、多くは先輩にそういうことを負うわ けなのだけれども、集団で教育を受けるよさというのが 大学の教育にはあると思うのです。徒弟制度のいいとこ



増村紀一郎

ますむら・きいちろう

美術学部工芸科漆芸研究室教授。
1941年東京都生まれ。
67年東京芸術大学美術学部工芸科卒業。
69年東京芸術大学大学院美術研究科
漆芸専攻修了。
71年から東京芸術大学非常勤講師、
82年助手、86年講師、90年助教授。
97年より現職。
2002年には紫綬褒章を受章。

ろは大学でも十分学べる。それは、教官の背中を見るの と同時に、いろいろな仲間のやつてることを見て、見 よう見まねで身にしみついていく教育を学校でもできる かなと思います。そういう意味で僕は学生が、できるだ け学校に長くいることが、こういう世界での勉強をする にはいちばん必要なことじゃないかなと思います。

野村 諸先生方がおっしゃるお話にも同感ですし、徒弟 制度というのは、私の体験からすると、教わるというよ り盗むという感じが強いです。実際に手とり足とり教わ るのではなく、四六時中一緒にいて、それで何かを感じ とつていくことが多いのです。またそれが旺盛で ないと一人前になれません。教わることだけを教わって いればいいということじゃないのです。徒弟制度の本當 の意味のよきを学校に取り込むことは、私たちの 能の世界では十分に成り立つだろうという気がいたしま す。六〇〇年という伝統があると言われておりますけれ ども、それも時代時代の、それこそ先端であり、価値観 というものと切つても切れない関係になかつたら続きま せん。今日もまた次なる未来へ向かって発信するために は、そういう感性は古くなつてはいけないのでないで しょうか。

いればいいということじゃないのです。徒弟制度の本當 の意味のよきを学校に取り込むことは、私たちの 能の世界では十分に成り立つだろうという気がいたしま す。六〇〇年という伝統があると言われておりますけれ ども、それも時代時代の、それこそ先端であり、価値観 というものと切つても切れない関係になかつたら続きま せん。今日もまた次なる未来へ向かって発信するために は、そういう感性は古くなつてはいけないのでないで しょうか。

学生といつ未来形

増村

大学において過去と現在と未来を分けたときに、 われわれは現在であり、過去も知っていますが、学生は 未来がある。われわれ教官は歴史的な過去の話をするし、 現状はこうである、漆の未来はこういう社会に対してもの 提案があるのではないか、世界に対してはこういう発信 ができるのではないかを絶えず話していきます。すると 学生はそれに応じる形で、作品をつくつていきます。 それが現在であり未来になつていくし、学生も芸術家で すから、現状をそのまま受け入れるというのではなくて、思

世の中を革新していこうという気持ちで芸大に入つてき ます。将来に自分の仕事をかけているという学生がほど んどだと思うのです。

山本 レッスンをするだけではなくて、例えば昼ご飯を 食べるときにも一緒に話をしようと誘うと必ずみんな 来ますよ。あえてそういうところで非常に気楽にしゃべ るのではなく、四六時中一緒にいて、それで何かを感じ とつていくことが多いのです。またそれが旺盛で ないと一人前になれません。教わることだけを教わって いればいいということじゃないのです。徒弟制度の本當 の意味のよきを学校に取り込むことは、私たちの 能の世界では十分に成り立つだろうという気がいたしま す。六〇〇年という伝統があると言われておりますけれ ども、それも時代時代の、それこそ先端であり、価値観 というものと切つても切れない関係になかつたら続きま せん。今日もまた次なる未来へ向かって発信するために は、そういう感性は古くなつてはいけないのでないで しょうか。

野村 「学ぶ」という言葉の語源は「まねる」だという 言葉だと聞いたことがあります。ただ私たちは、足袋を はいて舞台に乗つたときだけに真似をしたり写すのでは なくて、日常的ななからさまざまなものを攝取して、 引き出しにいっぱい詰め込んでいないといけない。引き 出しが空っぽになつていたのではだめだ。見るもの、聞 くものみんなすべて芸に取り入れられるんだと考えてお ります。ですから、道路を隔てた美術学部のほうへも 進んで行かなればいけないと言つているのです。

日本の伝統を世界に聞く

堀口

海外といかに交流していくかも重要な課題です。 工芸科のほうにも、外国の大学から留学したいという話 は毎年あります。ただ日本の欠点として、受け入れ態勢 がまだ弱いのです。この大学としても、ひとつの中 ステムとしてまだ確立してない面もあって、単位の互換 性の問題とか、地理的に日本に来るには交通費がかかりますし、物価そのものが高いということもあって、思 うように外国の学生が入ってきてづらいという面はあります、その逆もまたあって、なかなか外に出づらいと。そ



野村四郎

のむらしろう

音楽学部邦楽科（能楽）教授。

1936年東京都生まれ。

52年東京教育大学附属中学卒業。25世觀世流宗家左近に内弟子として入門。

62年能樂觀世流シテ方として独立。

78年重要無形文化財総合指定を受ける。

97年東京芸術大学音楽学部邦楽科非常勤講師。

99年東京芸術大学音楽学部邦楽科教授。

98年紫綬褒章受賞。

ういうところはおおい改善されていくのではないでしょか。外国との姉妹校提携は音楽のほうがむしろ進んでいるぐらいですけれども、美術のほうでも遅ればせながらいろいろな大学とのコンタクトをとって、急速に国外との交流が進んでくると思います。もちろん国内の交流も、大学院が早くから整備されましたので、いろいろな大学から来ております。

野村 私のところには、アメリカからの留学生が一人います。その人は、もうほとんど日本人の感性と気持ちを持つている人で、京都に長いこと滞在して狂言の勉強をし、そしてこの大学へやつてきたという経歴の人ですから、一般的の学生さんと日常的にもほとんど変わらない。ただ、宿舎の問題ですとかそういうことはみんな苦労しているようです。そういう環境をぜひとも完備してほしいなと思います。

山本 尺八では、わたしの知るところでは留学生は七人卒業していました。フランス、アメリカ、それに韓国や中国が多いです。彼らに感じることは、日本の感性をむしろ日本人よりも知るうと努力するんです。日本人が日本の樂器を知らないで、新しいミュージックに走っているのが非常にもつたいない。日本人だったらもつと知るべきだと思います。中国へ行つたときに、民族樂団があ

つて、ほとんど自分の国の伝統樂器で構成されたオーケストラがあるんです。私の尺八コンセルトをそこでやつたのですけれども、そういう試みが日本にはないわけですね。ですから今芸大でできることは何だろうかと考えると、総合アンサンブルなんです。邦樂アンサンブル研究部というのをつくりたいと思っています。

増村 漆には今韓国の留学生が一人とドイツから一人留学生が来ておりますけど、どうしてドイツで漆かと言いますと、江戸時代、オランダ商人が島を通じて大量に日本の漆器品をヨーロッパに運んでるんです。それでオランダとドイツは非常に土地が近いですから、日本の漆器品が向こうの貴族や富裕層にすばらしく人気があったのです。するとヨーロッパでも日本の漆に似せた紙を積層して器をつくって、ヨーロッパ製の材料で漆に似せた黒色の塗料を開発し、そこに蒔絵を描いたような形のヨーロッパ製の漆器を大量につくるといった地場産業まで起きてしまう。マイセンの焼き物が伊万里焼の影響でできたと同じように、ヨーロッパに漆器の地場産業があるのが、ここ何年かドイツやフランスを調査旅行していくわかつたことなのですね。

ですからこれは誇るべき日本の文化であるということをどうやってわれわれが世界へ向かって発信していくか、それは東京藝術大学が行うべきだと思いません。日本の漆は、私は世界一だと思ってます。その世界一の漆を今度はどのように言葉にして表現するか（出版）、どのように実物を見せるか（展覧会）、若い後継者をどのように養成していくか（教育）というのが芸大の役割だと思っています。

堀口 西洋では金属が生活に根づいていますが、日本の場合、江戸時代の鎖国の中に伝統的な感性というのがひとつのかたちをとつて出てきました。そのときに開発された金属に対する技術というのは、ヨーロッパに全くないものなんです。金属といえどとにかく光つていていうヨーロッパの感性に対しても非常に目新しく映つて、日本の金属の扱い方を学びたいという人が見直されて、目新しくいうこともありますけれども、非常に評判がいいです。

野村 能の場合は、いわゆる乱世のときに生まれた芸術で、いわば大衆的芸能でしたが、江戸三〇〇年の間に儒教の精神の影響を受け、また武家社会の式樂となつたことで、大衆から遊離して、発展がとまつてしまつたわけです。そして明治になつてから、また新しい能が始まり、今日の能のもとどいうのはやっぱり戦後ですからね。時代時代で随分嗜好が違つてきますし、世の中の価値観というもとと切つても切れない関係にあるのだろうと思います。ただ、能は長い時間がかかるものですから、観客がその時間を我慢できるか。今の時間の流れとタイムスリップしたようなところがありますので、知的にどちらまえるだけではだめなのです。

日本人の文化観というのは、私は知的ではないのではないかなど、情でどちらえていくような感性というのではなくて、日本人にあるのではないかと思っているのです。これは岡潔先生の影響ですが、他の国の方々は知的にどちらえて、そのに対しても、日本人は情を積み重ねた上に知があると、そんな感じがするのです。若いたちは知的に物事をどうあ美しいなど思わない、すごいなとか、感動するとか、情を体にいつも感じとつていないと死に体になつてしまふのです。私たちの舞台藝術はすぐ消えてしましますし、残らないでしょう。そういう意味で、「生き物」を演じるのだから、それには自分の体が生き生きしていること、その体づくりのひとつとして何でも情でどちらえるという

ことがあります。金属に対する技術というのは、ヨーロッパに全くないものなんです。金属といえどとにかく光つていていうヨーロッパの感性に対しても非常に目新しく映つて、日本の金属の扱い方を学びたいという人が見直されて、目新しくいうこともありますけれども、非常に評判がいいです。

野村 能の場合は、いわゆる乱世のときに生まれた芸術で、いわば大衆的芸能でしたが、江戸三〇〇年の間に儒教の精神の影響を受け、また武家社会の式樂となつたことで、大衆から遊離して、発展がとまつてしまつたわけです。そして明治になつてから、また新しい能が始まっています。そして今日の能のもとどいうのはやはり戦後ですからね。時代時代で随分嗜好が違つてきますし、世の中の価値観というもとと切つても切れない関係にあるのだろうと思います。ただ、能は長い時間がかかるものですから、観客がその時間を我慢できるか。今の時間の流れとタイムスリップしたようなところがありますので、知的にどちらまえるだけではだめなのです。

日本人の文化観というのは、私は知的ではないのではないかなど、情でどちらえていくような感性というのではなくて、日本人にあるのではないかと思っているのです。これは岡潔先生の影響ですが、他の国の方々は知的にどちらえて、その対しても、日本人は情を積み重ねた上に知があると、そんな感じがするのです。若いたちは知的に物事をどうあ美しいなど思わない、すごいなとか、感動するとか、情を体にいつも感じとつていないと死に体になつてしまふのです。私たちの舞台藝術はすぐ消えてしましますし、残らないでしょう。そういう意味で、「生き物」を演じるのだから、それには自分の体が生き生きしていること、その体づくりのひとつとして何でも情でどちらえるという

堀口 これから交流のあり方の主流としては、学生がもう少し気軽にやりとりできる空間設定というのが必要かなと思っています。今では、交流といつても、どうしても教育が表に立たざるを得なかつたのだけれども、これからはバックアップの体制をうちの大学としてとすれば、ベストだと思うのです。今たまたま陳列館で、油画の学生が主体で、学生同士の交流展をやつてますけれども、非常におもしろい展覧会になつていています。金銭的な面で学生はだいぶ苦労はしたようですけれども、やはり学生が主体になつていると、未来志向のおもしろい展覧会になる。

山本 尺八の場合は、八年ぐらい前から、四年に一度世界尺八フェスティバルというのをやりまして、一回目を日本の岡山でやつて、二回目はアメリカのデンバーの近くにあるボルダーでやりました。いろいろなフォーラムやコンサートをやるのですが、そこで驚いたのは、日本人は九五、六名で、ほか三〇〇名は全員外国人なんです。全世界から来ているということは、尺八がこれだけ広まっているのだなと実感します。日本の感性を知りたい、なるべく日本語をしゃべりたいという外国人が多かつたので、むしろ日本人のほうが教わったような気がします。結局受け入れ態勢としましては、日本語ができなければダメだとかいうのが昔ありましたよね。しゃべれないでも笛は教えられますから、外国の学生がどんどん来たときに、対応できる受け入れ態勢があつてもいいかなと思います。

増村 美術というものは美の理想を追求しますけれども、工芸やデザインは、理想の生活を求めるという側面があります。そうすると、アジアをはじめ发展途上にある国に対しても、どういうような産業を興すか、その土地の資源を加工して工芸として成り立たせるかという面で、今までの日本が持つていたノウハウを提供できるかと思う

のです。

今の日本の社会というのは、生産型の社会から消費型の社会に変わつてしまつて、今までの経験や考え方をつくろうとか、新しいものをつくろうと企業は知恵を絞つて、しかしこれからは、今までの経験や考え方を生かして、これからつくろうとしている国にノウハウを提供していくことも重要なのではないか。そうすると芸大ができる役割は大きい。美術教育や、工業教育、デザイン教育などたいへん幅広い活動ができると思います。優秀な卒業生もたくさんいますし、かつて日本の地場産業を応援したような形で发展途上国に対するアドバイスするというの大いにできると思います。

野村 能は、昨年ユネスコの「承認遺産の認定を受けたことで、日本の能から世界の能へと、発展したといえるかもしれません。ただ外国人の留学生でも、研究者は多いんですけど、実技をやるという人たちは非常に少ないのであります。この学校の使命は実技を教えるところにも大きなものがあるように思います。また、学生による海外公演であるとか、外国へ出でいろいろなものを交歓し、また採取して、そしてまた日本に還元していくことがもし芸大でできればすごいことです。

情感の教育

ところなんですね。その目に見えない裏側を見抜くまなざしや、心をいかに伝えるかが重要なのだという感じがします。

堀口 ものを表現するに当たっては、とにかく感性は非常に大事なこと、これはもうだれでもわかることなんですね。ただ、技術を通して感性をどれくらい表現し切るか、どの徒弟制度の話にもかかわつてくるのですけれど、昔の人たちが修業に費やした時間というのは圧倒的に長いわけですね。私たちの場合は、大学へ入ってきて初めて触れて、そこからスタート、なかなか技術を磨く時間がどれないです。けれども、やっぱり修練に修練を重ねて出てきた技術のすごさというのは、存在すると思うのです。それを早い時期に、できるだけ学生に知らせたいと思います。

野村 いいものにいつも触れていれば悪いものはわかるですね。悪いものばかりを見ていてもいいものはわからぬという話は聞きますけれども。あとは、ちょっと禅問答みたいですけれども、言葉も言わぬ解くも解かれないようなところに何かが存在しているんだというのがわれわれ芸術家の仕事だと感じています。

(1003年6月4日)



山本泰正(邦山)
やまもと・やすまさ(ほうざん)

音楽学部邦楽科(尺八)教授
1937年滋賀県大津市生まれ
58年京都外国语短期大学卒業
62年正派音乐院乐理学科卒業
77年東京芸術大学非常勤講師
96年東京芸術大学客員教授
99年東京芸術大学教授
2002年重要無形文化財(人间国宝)保持者認定

東京芸大と「工芸」

わが国の造形美術の歴史は、古く縄文・弥生時代にまで遡ります。仏教文化が伝来すると多くの造形表現の技術や材料が伝えられて絢爛とした文化の華が開き、その後も各時代の様式を伝えながら現代にいたるまで綿々として受け継がれています。これらの造形文化の成り立ちはとりもなおさず各時代の感性と、「工芸」の素材と技術の歴史といつても過言ではないでしょう。

「工芸」には、彫金・鍛金・鑄金といつた各種の金工技法、漆芸、木工芸、染、織、陶磁、ガラス、皮革、七宝、竹芸等があります。東京美術学校（東京芸術大学）は開学以来百十余年の長い歴史のなかで、「工芸」の分野で、設立当初に金工の三専攻（彫金）・（鍛金）・（鑄金）と「漆芸」が設立され、戦後になって新たに「陶芸」・「染織」の分野、さらに「木工芸」が加わり、「ガラス造形」が新設されました。これら「工芸」の各専門分野では、わが国の伝統を継承しながら時代ごとに生まれる新たな感性で表現し、現代にいたるまで制作活動を繰り広げ、大きな成果を上げた多くの人材を輩出しました。

大学美術館で開催される「名作200余点でたどる『工芸の世紀』明治の置物から現代のアートまで」は、このように極めて幅の広い専門分野で活躍してきた作家の作品を主軸として、時代背景をも考慮しながら、「工芸」という切り口で一世紀余にわたる歴史を俯瞰できるような展覧会です。このよくな企画・開催は過去においてもそ

の例はなく、二十一世紀初頭にその全容を展示・公開することは将来の美術工芸のあるべき姿を模索し、また近代工芸の流れを整理する意味においても大きな意義を持つものでしょう。

教育と制作の現場から

この展覧会は、明治から平成まで日本の工芸の流れを俯瞰し、東京美術学校・東京芸術大学の工芸の役割とその位置づけを確認するものもあります。芸大の歴史を「集成」しておくことは、学問的にもたいへん有効なことであるといえるでしょう。また教育と制作の現場である芸大とその大学美術館でなければできない、特有のプレゼンテーションをおこなうことにより多く工芸の現場を観ていただこうという試みでもあります。

前史としての江戸時代の工芸をはじめとして、開国・政府による殖産興業・博覧会の時代から帝室技芸院制度ができたころを経て、東京美術学校の工芸、大正・昭和の工芸のさまざま動向を眺めます。また、特別企画として現役教官の作品も展示します。

会期中はギャラリー・トークを企画しており、各専攻分野の専門家による掘り下げた解説や作品談義などをお聞かせできる予定です。

一方、美術学部主催による国際陶芸展・国際シンポジウム・国際陶芸ワークショップの開催、また漆芸講座によるワーキングショップ、シンポジウム、金工分野による実演やガラス造形によるバーナー



金彩佐波理盤
戸津圭之介

1983年（昭和58）
物型鍛金、佐波理 9.2(h)径34.0
第30回日本伝統工芸展出品
芸大美術館



漆工
国会議事堂御便殿扉-1
東京美術学校

1931年（昭和6）
乾漆粉蒔（潤）金研出・平・高蒔絵 色漆 螺鈿（夜光貝）
縦93.4 横78.5 扉板・縦69.0 横56.0
芸大美術館

工芸の世紀を俯瞰する

「名作200余点でたどる『工芸の世紀』明治の置物から現代のアートまで」展の意義

戸津圭之介

金工-彫金
絵舞樂太平樂置物
海野勝珉
1899年（明治32）
42.3×21.0×46.0
宮内庁三の丸尚蔵館



ワークの開催も計画されており、東京芸術大学美術学部ならではの制作現場から「継承と発展」の意義を改めて認識し、将来的な造形教育の重要性を、展覧会をとおして十分に感じ取るのは大切なことだと思います。古くから伝えられてきた造形文化の数々は、それぞれの時代の要請と飽くなき探究心の結果もたらされたものなのです。単に各素材の加工技法にとどまらない高度な科学技術の粋であり、まさに継承と発展の賜物であるといえるでしょう。

また、連綿として伝え受け継がれた文化は、「現代」のなかに脈々として流れづけています。その伝統の底力の上に新しい華が開き、その時代を創り出すことになるのです。このことを認識することは造形芸術の教育現場に携わるわれわれにとって重要な命題であると思います。

先祖が遺してくれた文化的な遺産——その精神、素材、技術を正しく認識し、そこから触発され刺激を受けて創造的精神を起こすのです。個性・感性・創意のもとに咀嚼し受け継いで、はじめてそこに発展性のある新しい文化が息づいてくるのだといふことは長い歴史が教えてくれます。

また一方で、継承されるべき文化はその時代に正しく認識されなければ発展は

継承と発展の意味

わが国の造形文化の歴史に想いを馳せ、「継承と発展」の意義を改めて認識し、将来的な造形教育の重要性を、展覧会をとおして十分に感じ取るのは大切なことだと思います。古くから伝えられてきた造形文化の数々は、それぞれの時代の要請と飽くなき探究心の結果もたらされたものなのです。単に各素材の加工技法にとどまらない高度な科学技術の粋であり、まさに継承と発展の賜物であるといえるでしょう。

若い時代には安易な応用の動作から入るのではなく、少々時間がかかり、まり道をしてでも基本的な事柄をしっかりと身につけておくことが必要だと思います。そうすれば将来にいくらでも本格的な応用の動作に適応していくのではなじでしようか。

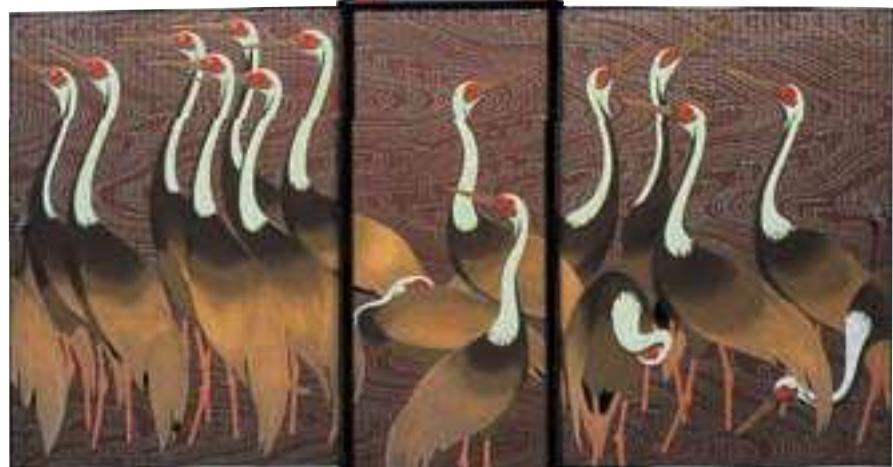
結果ばかりを先追いするのではなく、そこに辿り着く過程がどれほど大切なものであるかを改めて認識すること。それが、継承されてきた文化の将来への正しい橋渡しになり、発展性を持つ本来の意味の継承になるでしょう。試行と葛藤こそ、文化の発展に繋がっていくのです。

この機会に、改めて物をつくるということ、工芸すること、ものづくりの大切さを知り、作品が出来上がる過程の面白さを体験していただきたいと思います。頭の中で考えるだけではなく、「手」で考えること、熟慮しながら行動し、行為しながら考え方を進め纏め上げる。こうしてものが出来上がり、つくること、手を動かすことの楽しさ大きさを再認識して、子供たちや若い世代の美術教育の現場でさらに採用され積極的に取り入れられていくことが求められているのです。

「十景の世紀」展の大きな意義も、まさにここにあるのではないでしようか。

試行と葛藤というプロセス

若い時代には安易な応用の動作から入るのではなく、少々時間がかかり、まり道をしてでも基本的な事柄をしっかりと身につけておくことが必要だと思います。そうすれば将来にいくらでも本格的な応用の動作に適応していくのではなじでしようか。



陶磁
彩磁花卉文花瓶
板谷波山(1872-1963)
1932年(昭和7年)
薄肉彫 高32.0 口径23.8
昭和7年第13回帝展
芸大美術館

「名作200余点でたどる『工芸の世紀』明治の置物から現代のアートまで」は東京芸術大学美術館にて10月7日(火)から11月30日(日)まで開催 主催:東京芸術大学・朝日新聞社

邦楽総合アンサンブル 研究の意義

われわれの三昧線音楽のなかにも長唄の「熊野」があります。横断的試みとしては、説得力のある演目であったと思います。

五月に奏楽堂で上演された「創作 竹取物語」「能舞 相間」は、演奏藝術センタ一の主催、音楽学部邦楽科の企画により、昨年の「熊野の物語」に引き続き企画されたものです。能樂 長唄、山田流筝曲 生田流筝曲 尺八、邦樂離子、雅樂、常磐津日本舞踊の諸専攻の教官が参加した邦楽総合のアソサンブル公演です。このなかで私は打樂器部門と、新しく作曲された部分については作調という形でお手伝いしました。

「熊野」から「竹取」へ 邦楽総合アソサンブル研究の試み

三浦正義（望月太喜雄）



「熊野の物語」（2002年5月3日・奏楽堂）より



〈邦楽総合アソサンブル研究〉について
は、芸大として待望されていたものがやつと実現したかなという思いがあります。外の世界ではさまざま実験的な試みはおこなわれておりますので。ただ、歩みを始めたのですから、これからは急速に発展していくことになるでしょう。邦楽科には多くのセクションがあり、横断的なつながりがうまくかみあわないなど、こつした大規模な企画は成り立ちません。また、ひとつの大学のなかにこれだけのセクションが集まっているのですから、芸大の責任はたいへん大きいことだと思います。

「熊野」と「竹取」

〈邦楽総合アソサンブル研究〉の第一回であった「熊野の物語」は、「熊野」というテーマが邦楽の世界に幅広くわたる共通の題材であることから選ばれました。能樂に「熊野」という曲があり、山田流の筝曲にも「熊野」という曲があります。また、

他の学科との共同作業ができたのも芸大なりではあることです。美術学部の伊藤隆道教授による舞台装置と音楽の合作は、「すすが芸大」だという反響がかなりありました。また、私たちはふだん日本舞踊とのつながりが深いのですが、今回、能樂や狂言の方、なかでも野村萬作さんや萬齋さんとやらせていただいて、台詞に対する意識の高さに感銘を受けました。

教育的效果

学生への効果といつては、ふだんは見られない先生の姿、たとえば放課後に作曲しているところや、音楽を聴き、振りを見て作調する姿を学生が見て、こういうふうに作調するのかという勉強になります。そういう点では学生にとって教科書で説明されるよりも勉強になるのでないかと思いま。

邦楽が学校教育のなかに取り入れられ



『創作 竹取物語—物語の出で来始めの祖—』
『能舞 相間』は2003年5月3日（土・祝）に
東京芸術大学奏楽堂で催された。



みうら・まさよし(もちづき・たきお)
音楽学部邦楽科（邦楽団子）助教授
1944年神奈川県生まれ。
74年から東京芸術大学音楽学部邦楽科
非常勤講師を数度にわたり務めたのち、
2000年より東京芸術大学音楽学部邦楽科
助教授。

たじとじ、これがひたむきやま影響が出でくるのではないでしょつか。いままでは個人について古典を習得してきた学生がほとんどだったのですが、学校教育のなかで興味をもつた人が大学に入ってくる。芸大としては、それに見合った教育者を全国に輩出していくという務めもでてくるでしよう。

ただマン・ツー・マンで、二四時間そばにいて教え教わる——人間対人間といいますか、そこから受け取るもの、それがほんとうの「芸」なのではないでしょうか。芸の奥にあるものはなかなか口では教えないものです。

これから展開

じついつた舞台の場合、どうしても動きのほうが主になってしまつところがあつて、それに対して音楽が合わざることになる。その辺では、演出がたいへんだつたと思います。

まだ一回目ですか、いまのところすべての分野を表に出す、出番を公平に与

えのとじう形で進んでいますが、これからもむづかしいのセクションといのセクションを主にやろうとかということになつていくかと思います。そのためには何回も回を重ねてじっくりが必要でしよう。「熊野の物語」の話が最初にあつたとき、邦楽全般を網羅した作曲をする先生がいらっしゃるのかと期待していたのです。実際には、邦楽科の先生同士が持ち寄つたもので組み合わされたのですが、最初のアンサンブルの出発点としてはしようがないのかもしれません。

邦楽だけをやるにしても、映像美術や作曲家の先生の手も借りたい。そのためには邦楽の作曲家を養成できないかと思ひます。あるいは、作曲科のなかで邦楽を作曲する人が出てきて欲しい。

芸大は先端をいくわけですから、今までセクションで固まっていたのが、このアンサンブルをきっかけに、いろいろな動きができると、もっと芸大の特色が出てきて刺激も生まれることを期待しています。

NEWS

2003.4～
2003.7



石井威望講演会

交 流

◆外国人留学生との 懇談会を開催

五月十五日、大学会館内学生食堂において、留学生と関係教職員、チユーターとの懇談会を行った。謝辞はステーブ・ドミニク・エリリ（音楽：博士後期課程二年、イギリス）さんが九五名の留学生を代表して述べた。交流を通じ、相互理解を深めることを目的として毎年開催している。

◆神田祭に学生、卒業生が参加

五月十日、江戸開府四百年を記念しての大祭となった神田祭に、昨年の本学芸術祭で学生が制作した「みこし」四基（山車）とサンバチームが、また、邦楽科卒業生グループによる長唄などで、戸時代に流行した粋でいなせな幻の「底抜け屋台」を復活させ、総勢約七〇名が参加した。沿道からは絶え間ない拍手と熱い声援を受けていた。



受 章・受 賞

◆芸術院賞に

前学長澄川喜一名誉教授 平成十五年六月一日 前学長の澄川喜一名誉教授が平成十四年度（第五十九回）恩賜賞・日本芸術院賞を受賞された。

◆野田哲也教授紫綬褒章受章

平成十五年春の褒章において、野田哲也教授（木版画）が紫綬褒章を受章された。

◆春の叙勲、

三浦小平二名誉教授が受章 平成十五年度春の叙勲において、本学関係者では、人間国宝の三浦小平二名誉教授（陶芸）が勳四等旭日小綬章を受章された。

運 営

◆三笠宮殿下に名誉客員教授の称号

本学では、芸術並びに教育に貢献した者に名誉客員教授の称号を授与している。このたび、昭和六十年度から平成十四年度までの長年に渡って、美術学部客員教授

◆四芸祭、活発な学生間の交流

四芸術大学体育・文化交換会が五月十一日から十五日まで、京都市立芸術大学において行われた。今年は四十九回目。両学部の学生、計一七〇名が参加した。文化事業では、合同展覧会や演奏会、小・中学生を対象としたワークショップなどが行われた。

受 章・受 賞

◆芸術院賞に

前学長澄川喜一名誉教授 平成十五年六月一日 前学長の澄川喜一名誉教授が平成十四年度（第五十九回）恩賜賞・日本芸術院賞を受賞された。

◆野田哲也教授紫綬褒章受章

平成十五年春の褒章において、野田哲也教授（木版画）が紫綬褒章を受章された。

◆春の叙勲、

三浦小平二名誉教授が受章 平成十五年度春の叙勲において、本学関係者では、人間国宝の三浦小平二名誉教授（陶芸）が勳四等旭日小綬章を受章された。

運 営

◆三笠宮殿下に名誉客員教授の称号

本学では、芸術並びに教育に貢献した者に名誉客員教授の称号を授与している。このたび、昭和六十年度から平成十四年度までの長年に渡って、美術学部客員教授

時代精神を如実に反映した実践でなければならぬ。もちろん、実践的であることや柔軟であることを目指している大学は、世の中にたくさんある。しかしながら、実際に実践が大学という教育の場で特別な意味をもつてゐる所は少ない。大学という場が学生個人の資質や才能に影響を与えるという考え方は、国立大学の独立行政法人化が目前に迫った現在さらに重要なになってくる。どこにでもある「場」では、日本の大学は国際競争力を失い、その役割がさらに小さくなってしまうに違いない。大学の自治は、「場」のあり方が特有であり続けることによって可能になる。このよ



1 week trial



IMA演習

うな特有な「場」にとつて、何よりも「人的資源」は重要である。
幸い、本年度入学した二八名の第一期生は、「場」のあり方という重要なテーマに取り組み学内外に影響を与えることのできる資質や才能に溢れている。この特有な「場」がアートの領域に限らず、広く深く社会や生活の隅々に対してもいろいろな意味で影響を与えることのできる教育研究が実践される場は、世界中どこを探してもこんなアートスクールはない。今のところ、そう自負できる。(かつら・えいし／美術学部先端芸術表現科助教授)

授として「古代オリエント美術史」に関する講義を受け持たれていた三笠晋彦(仁親王殿下に名誉客員教授の称号をお贈りした)。殿は、古代オリエント史の第一級の研究者として知られ、多くの著書は、我が国の古代オリエント研究の水準を飛躍的に高めたとして評価されている。本学においては、美術教育の講座で、人間と文化や芸術との関わりを授業で展開された。興味深いテーマと数多くの発表調査をふまえた実証的資料の提示、深い教養と新しい知見の披露などは、本学の学生だけでなく卒業生や外部の方々の聴講をみるとことになり、本学の美術教育の発展に貴重な貢献をされた。



置された先端芸術表現専攻の入学式が奏楽堂において挙行された。美術学部は志願者五三一八名のなかから二五一一名が、また、音楽学部は志願者九六四名のなかから二五一一名の難関を潜り抜けた学部一名計八九九名(先端・院生は二八名)の新入生がそれぞれの歓びを抱いて参列した。本学ならではの奏楽会が始まり、平山学長から新生に対する入学許可の告知のあと、式辞が述べられ、奏楽で結んだ。奏楽は、音楽学部各科の持ち回りで今回も管・打楽器専攻により行われた。また、四月九日には音楽学部附属音楽高等学校入学式が高校内ホールにおいて行われた。高校も在校生による奏楽が行われている。

◆平成十五年度入学式を挙行、
奏楽に感動無量
四月十日に学部、大学院 四月十一二日には本年度から大学院美術研究科に設

◆韓国国立中央博物館所蔵 「日本近代美術展」の 入場者七万人

四月三日から五月十一日まで大学美術館で開催された「日本近代美術展」は、期間中七万人を超える入場者があり、盛況のうちに終了した。同展覧会は、韓国国立中央博物館に所蔵されている日本の近代美術品約二〇〇点のなかから、日本画、工芸作品計七〇点が展示された。これらの中には、横山大観をはじめ芸大の前身である東京美術学校出身の作家が多く含まれ、実に半世紀の時の流れを越えての里帰りであった。

◆ガラス造形工房開設
六月十九日、取手校地において、四月に開設したガラス工芸講座の電気炉に入れられたため、これから作業と制作の安全を祈願する開所式が行われた。



第1回の女子卒業生 1951年（『婦人の友』掲載、『東京美術学校百年史 第三巻』より）

東京芸術大学美術学部1951年

自由と平和

佐藤道信

日本近代美術史、主要著書『〈日本美術〉誕生—近代日本の「ことば」と戦略』『明治国家と近代美術—美の政治学』

——九五一年三月二十三日、六十一年回をかぞえた卒業式は、華やかな卒業式になった。はじめて本学から女子学生が卒業したのである。すでに二年前、東京美術学校は新制の東京芸術大学美術学部となっていた。この年、美術学部を卒業した女子学生は二十五名。男女同権、自由と平和の時代を告げる彼らの旅立ちは、雑誌でも取り上げられて話題になつた。『婦人の友』にのった八人の卒業生（1）は、油絵の安井曾太郎と梅原龍三郎、彫刻の石井鶴三研究室の人たちらしい。石膏室で撮つたのだろう。うしろにミロのヴィーナスと、ミケランジェロのモーゼの彫像が見える。とても芸大っぽい景色のひとつだ。

彼女たちが入学したのは、終戦翌年の春だった。本学では戦前にも、男女共学の実施を何度も申請していたらしい。それが敗戦を経て、GHQの教育改革によって実現したのである。この写真が輝いているぶんだけ、戦争に散つた学生がここまで生きていたらと思ってしまう。というのも前号での久保克彦も、同じこの石膏室で写真をとつていたからである（芸大通信5）。彼らにとってこの場所は、芸術と自由のシンボルだったのかかもしれない。彼女たちが入学した年の入試は、志願者八八九名中、女性が一〇〇名をこえていたといつ。合格者は一八五名で、そのうち三七名が女性。ちょうど五分の一が女性だったことになる。ただこの年の入試は、終戦直後の混乱期のためやや変則的なものだったようだ。受験者が年齢も経験度もバラバラだったため、とりあえず多數を合格として、予科の一年間で「適正」を見たうえで、学年末試験で厳しい成績判定をしたらしい。そのためこの学年の学生数は、卒業時点で約三分の一に減つている。女子学生が、入学時の三七名から、卒業時に約五名に減っているのも、こうした事情による。比率としてはほぼ同じ。ただ成績は、一体に努力家の多かつた女性のほうがよかつたらしい。ある学科では、トップから上位すべてが女子学生だったといつ。この傾向は、少なくとも現在にも続いている。また詳しい経緯はわからぬが、この学年の女子学生のなかで鳩山（渡辺）信子が、

実は一人だけ前年の春に卒業している。正確には彼女が、女子卒業生の第一号ということになる。

規律の厳しい女学校から入学して来た女子学生にあっては、野放図なまでに自由な校風が、ます衝撃つたらしく。入学したのはいいが、女子の授業もなければトイレも公用。復員したこの学生もいた。初めは緊張の毎日だったらしい。学校は男女交際には一切関知せず、問題を起こしたら即刻退学の方針をとつた。実際そつた例もあつたようだが、逆に女性で親切にしてもらつことが多いかったと回想する人もいた。男子学生にとつては、たぶん「うれしへずかし」が本音だったろう。男女三人でとつた写真（2）は、そんな彼らの気持ちが初々しいぎこちなさによく表れた、とてもいい写真だ。研修旅行で配給物資を運ぶ彼らの表情も、明るく力強い（3）。最低限の貧しさのなかで、すき通るような希望が輝いている。芸術は、やつと自由と平和の時代を手にしたのだった。

（せとう・どうしん／美術学部芸術学科助教授）

右：戦後第1回入学生（平出敏子氏提供、『東京美術学校百年史 第三巻』）
下：配給物資を運ぶ学生たち（1946年7月の高山夏季研修会、『東京美術学校百年史 第三巻』）



タイムカプセルに乗つ

今

からちょうど一〇〇年前の一九〇三年（明治三十
六）七月二十三日、日本人初のオペラ公演として、

グルックの『オルフェオ』が奏楽堂でおこなわれた。このとき、東京帝大で哲学を講じ東京音楽学校ではピアノを教えていたラファエル・フォン・ケーベルが、ピアノ伴奏者として参加した。この公演は学生の発意によるもので、音楽学校からは奏楽堂を貸す以外に何の支援もなかった。ケーベルは根っからの絶対音楽の信奉者であつたので、オペラには興味を持つていなかつたが、学生たちの逸る熱意にほだされてつきましたのである。フランス人講師ノエル・ペリが指揮者として音楽の全体をまとめて、資金は学生のひとりの兄が出した。エウリディーチ役を歌つた三浦環によれば、上演は大成功だったが、一部の知識階級の間での文化運動に終わり、社会的に影響を及ぼさずに終わったことは残念だった」という。切符の一般売りはなく、父兄と関係者が招待された。今までこの『オルフェオ』初演は、日本の洋学史に残る快挙として高く評価されている。

一九三九年（昭和十四）に来日して藤原歌劇団の指揮などをしたマンフレート・グルリットが東京音楽学校でも授業をおこない、『アイーダ』の三重唱や二重唱などを柴田睦暉や川崎静子たち学生に歌わせた。オペラの楽しさを知った学生たちは何とか衣装を着けメーキャップをして舞台で歌いたいと願つたが、まだ情勢は相変わらず不利であった。

学校側がイニシアティヴをとる本格的なオペラ公演が実現したのは、一九五六年のことである。『オルフェオ』初演から半世紀以上も経つていた。四月十八、十九日の両日、日比谷公会堂にて、演目はヴェルディの『椿姫』。イタリア人ニコラ・ルッチの全面的指導を得て、日本人側では歌唱については柴田睦暉、舞台については俳優座出身の長沼広光が責任者としてあつた。ルッチはイタリアをはじめ世界各地で活躍していた職人的オペラ指揮者であった。独唱は四年生、合唱は三年生、管弦楽も学生によつた。資金的には外部団体の助けを借りて、ともかく第一歩を踏み出したのである。

東京芸術大学音楽学部1956年 芸大オペラ 第1回公演

瀧井敬子

音楽学（ドイツロマン派、および日本洋楽草創期の研究）。主要論文「幸田露伴と音楽、そして妹の延」「東西音楽の接点—音楽におけるジャポニズムの一侧面」「森鷗外とオペラ」



芸大オペラ公演第1回プログラム表紙

リハーサル風景。右はルッチ指揮芸大音楽学部学生オーケストラ、下2枚は歌手たちの立稽古



だが、「上野の生徒に白粉をつけさせぬ」とオペラ出演を禁止したかつての乗松校長の言葉が、呪いのように生きていって、このときも演奏会形式で十分だとする意見も学校内部から出て、推進グループの足を引っ張った。公演パンフレットに柴田睦暉は、憤懣やる方ない口吻で「少なくとも歌劇に関する限り、封建的で無智な因習の犠牲でしかあり得なかつた音楽学校時代はさておき、芸術大学と名のつく時代になつても、音楽学部の中に歌劇の正常な発展が望めなかつたのは一体何の罪だろう?」と書いている。主役のヴィオレッタは七人、アルフレッドは一人が交替で歌つた。新聞各紙は「予想以上の出来」に賛辞を惜しまなかつた。しかし、「清潔な歌いぶり『椿姫』」といふ『毎日新聞』の見出しが、当時の風潮をよくあらわしている。オペラの熱い愛情表現よりも、清潔に歌うことを世間も求めていたからである。柴田のいう「封建的で無智な因習」を乗り越えるのは、前途多難であったのだ。（たきい・けいこ／演奏藝術センター助手）

開かれた大学・ ワイマール・バウハウス大学との交流展

6

モダニズムの伝統に新たな挑戦をはかる芸術総合大学、ワイマール・バウハウス大学との間で作品を媒介としておこなわれた充実した国際交流。「グリーン・スペース」をテーマに学生が中心となって意味深い「ミニケーション」がはかられた。

「グリーン・スペース」を移植する

井村 彰

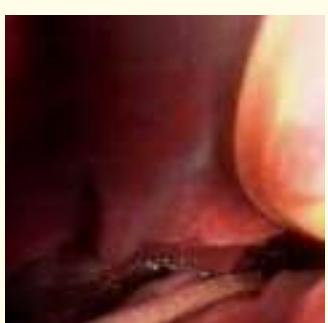
本学美術学部とワイマール・バウハウス大学造形学部の現代美術交流展「グリーン・スペース」が二〇〇二年（平成十四）九月二十日から十月六日まで取手校地で催された。両学それぞれ一〇人（ユニット）の学生が参加し、作品は大学美術館取手館とメディア教育棟およびその周辺の屋外で展示された。この交流展は、バウハウス大学のバーバラ・ネーミツ教授から本学美術学部先端芸術表現科の渡辺好明助教授に学生交流の提案が打診されたことから始まって、多くの方々のご協力を得て実現に至つたものである。

芸大側の選考には、美術学部の各科の教官があり、油画、彫刻、建築、先端の学生が選ばれ、加えて数名の教官と助手も展示に参加することとなった。バウハウス側の参加者はネーミツ教授のゼミ生たちが中心だったが、ドイツの美大生といつても国籍はさまざま、まだ授業の始まつていなかつた取手のキャンパスにインターナショナルな空気が広がった。展覧会に先だっては、九月十六日から三日間両学の学生たちによるワ

クショップ「インスタント・ガーテン」も開催され、芸術学科の学生も加わって日独混成グループによるそれぞの「庭作り」「庭さがし」が行われた。言葉の問題があつたとはいえ、町の散策や制作を介したものが多くも楽しいコミュニケーションは、学生たちにとつては展覧会に向けてのよき助走となつたようだ。

十七日には上野校地で「トランス・プラント—現代美術のなかの植物—」と題するネーミツ教授の特別講演会が行われ、今回の「グリーン・スペース」というテーマの下敷きになつてゐる彼女のコンセプトを理解する絶好の機会となつた。ネーミツ教授は、ご自身の作品制作だけでなく、植物を表現媒体として制作をしている世界中のアーチストを招く「アーチスト・ガーテン・ワイマール」というプロジェクトを続けている作家でもある。芸大でのこの交流展は、ワイマールの緑の空間を取手にも移植する（transplant）試みだつたといふるだろう。

参加者たちはそれぞれの仕方で「グリー



- 1.ワイマール・バウハウス大学中央棟
- 2.グロビウスの部屋
- 3.ワークショップ
- 4.ワークショップ
- 5.作品プラン審査風景
- 6.アーチストトーク

「グリーン・スペース」参加作品

2



1



ン・スペース」というトーマを独自に解釈し、それぞれの展示へとつなげていった。竣工してまもないメディア教育棟をうまく活用したものや、取手の緑と連携した屋外のインスタレーションなど、上野校地では得られないような展示も少なくなかった。展覧会のオープニングには予想以上の来客があり、それぞれの作品をみんなでアーチストトークといふたちで見て回った後、美術館の前で催された祝宴では夜遅くまで交流の乾杯と歌声が続いていた。

両大学の交流は、いのちのように学生を中心にお品を媒介として行われた充実したものであり、形式よりも内容が先行した意味のある国際交流だったといえねだい。今後はより円滑な交流事業が可能となり、正式な交流協定の締結に向けて準備中である。また、この「芸大通信」六号が発行される以前には、今度は私たち芸大のメンバーがワイマールに赴いて、交流展第一弾の「グリーン・スペースー光と影」に参加していよいよはすである。「グリーン・スペースー」および「グリーン・スペースー2」につづけては左記のホームページをご覗ください。
http://www.ima.fa.gaidai.ac.jp/green_space/index.html

ワイマール・バウハウス大学の起源は、一

(じむり・あきら／美術学部芸術学科助教授)

八六年に設立されたワイマール美術学校に遡る。その後、ヴァン・デ・ヴェルデが校長だったこともある工芸学校の時代を経て、一九一九年にヴァルター・グロピウスが設立したあの「バウハウス」として歴史にその名を刻んでいる。一九一五年の「テッサウへのバウハウス移転後は、ナチスの時代から東ドイツの時代へと美術と建築の大学として何度かの改組を重ねていたが、一九九〇年の東西ドイツ統一後、新しい大学として再生することになつた。一九九五年に「バウハウス」の名前を継承して現在の名称 (Bauhaus Universität Weimar) となり、現在は建築、都市工学、造形、メディアの四学部を抱える芸術総合大学となつている。大学はワイマール旧市街各所に位置して、今もバウハウス時代の建築が校舎として使われてゐる。

ワイマールは人口一〇万に満たない小さな町だが、国民劇場の前の有名なゲートとシラードの像が示すように、ヨーロッパ近代市民社会において優れた芸術文化を時代の節回りとに発信してきた屈指の文化都市であり、一九九〇年にはE3が毎年選定する欧州文化首都に指定されてゐる。



「グリーン・スペース」参加作品



東京芸大シンフォニア英國公演

イギリス・ロンドン、ケンブリッジでおこなわれた、芸大音楽学部史上初めての海外派遣。
戦争のさなかの海外公演で、学生たちは民族や時間を超えた「普遍性」を感じ取ってきた。



芸大の素晴らしさを 再認識した旅

佐藤卓史

芸大音楽学部の歴史上、初の海外派遣となるはずだった「芸大シンフォニア英國公演」が、アフガン空爆開始により成田空港で突然の中止に追い込まれてから一年半。今度はイラク戦争勃発でまたしても催行が危ぶまれたが、結局予定通り出発することになり、われわれは戦争の真っ只中をイギリスへと飛び立った。三月二十二日から四月一日までの十日間、計四回のオーケストラ演奏会を催す大規模なツアーワーとなつた。

自らヴァイオリンを弾き、素晴らしい超絶技巧を聴かせた魅力たっぷりのマエストロ、ドミトリ・シト「ヴェツキー」。可憐なハイティとパワフルなテイヴ、ふたりのトランペッターとの共演を楽しんだショスタコーヴィチのピアノ協奏曲。アンコールのバッハ＝ストコフスキ「前奏曲D短調」に聴こえた戦争犠牲者への追悼と平和への祈り。マンチエスターでの、現地の学生との合同オーケストラによるブライムスの第二交響曲。アンコールで演奏された叙情的なエルガーと大和魂全開の外山雄三。そして私たちを歓迎してくださった音楽院や大学の関係者の皆さん。たくさんシーンをひとつあげるとすれば、大英博物館の総石造りの展示室、驚くべき残響の長さという非日常的な音響空間の中、異様に遅いテンポで演奏されたベートーヴェンの第一交響曲であろう。ギリシア時代の巨大な石像



東京芸大シンフォニア 英國公演

2003年3月25日（火）ロンドン、英
国王立音楽院デューカスホール／3月
26日（水）ロンドン、大英博物館ネ
レイド・ルーム（ギリシャ・ローマ
展示室）／3月27日（木）ケンブリッ
ジ、ウエストロードコンサートホー
ル／3月30日（日）マンチェスター、
王立音楽院ブラウン・シブリー・ホ
ール（英国北王立音楽院シンフォニ
ー・オーケストラと合同演奏）

帰国演奏会－4月10日（木）東京上野、
東京芸術大学奏楽堂（写真上）

英國公演では4回にわたる演奏会で、ショ
スタコーヴィッチのピアノ協奏曲第1番、
ベートヴェンの交響曲第1番、ブラームス
の交響曲第2番、バルトークのディヴェル
ティメント、ストラヴィンスキーの管弦楽
のための交響曲などが演奏された



「ネレイド・モニコメント」をバックに、奏で
られたのは十八世紀ドイツの音楽。そしてそ
れに息を吹き込んだのはロシア出身の指揮者
率いる日本の学生オーケストラ。そこには民
族や時間を超越した、宇宙的な拡がりさえ感
じさせる普遍的な「何か」がたしかに存在し
ていた。

聴衆の温かく、時に熱狂的な拍手と歓声は、
東京芸大の水準の国際的高さを証明しただけ
でなく、ヨーロッパの伝統が息づくイギリス
の人々に、眞の感動をもたらしたことを示し
ている。改めて芸大の素晴らしい演奏を実感する
とともに、その記念すべき第一回公演にソリ
ストとして参加することができたことを大き
な誇りに思っている。

今回の公演実現にあたりご尽力くださった
皆さまには、本当に感謝の気持ちが堪えない。
この場を借りてお礼申し上げます。

〔ちょっとといい話〕メンバーの中にはこの春卒
業生となる学生も多かった。卒業式に出席で
きない彼らのために、王立音楽学院（RAM）
の公演終了後のパーティ席上で「仮卒業証書
授与式」がおこなわれ、卒業生ひとりひとり
に、RAMの修了証書用紙に実行委員の先生
方のサインが入った「仮卒業証書」が手渡さ
れた。前日の夜の提案から一昼夜のうちに密
かに準備が進められ、実現をみた先生方の粹
な計らいである。緊張の多い演奏旅行のなか
で、心温まるエピソードのひとつであった。
卒業された皆さん、本当におめでとうござい
ました。

（さとう・たかし／音楽学部ピアノ科二年）

秋の大学美術館 2003.9>>>2004.3

文化財を直すとひつじ
“仏を見る”展

長澤市郎



埼玉県横瀬町間魔天坐像 修理前



埼玉県横瀬町間魔天坐像 修理後

十年前から始まつた国際陶芸授業、今年は日本、韓国、中国、オーストラリア、トルコ、英國、米国、七カ国一〇大学の参加による世界陶芸ワークショップが芸大にて十一月一日から十一月十五日の十四日間開催されます。

大学院一年生が毎年一基ずつ築き上げた五基の薪窯と、既存の登窯を、陶芸を専攻している各國学生、教官約一〇〇名が、五日間（十一月一日から六日）窯焚き授業をします。各人各様の絵付け、釉掛け、自分たちの手によって焚き上げた陶芸作品を手

世界の陶芸—交流授業 ワークショップ・シンポジウムなど多彩な催し

島田文雄

に持つたときの感動は、あざやかな体験として学生の心に刻み込まれることでしょう。同時に、国際シンポジウム（十一月四日・五日取手校地、八日・九日上野校地）を開催。トルコ・アナドル大学学長の基調講演を中心とする各國教官による「芸術と技術」をテーマに各国情事を交えたシンポジウム。十一月八日の親睦会においては演奏芸術センターの協力を得て、日本文化あふれる邦楽パフォーマンスのタペが企画されています。十一月十一日は、工芸棟陶芸教室にて、引率教官による公開ワークシ

修理は事前の調査から始まる。調査の基本は、目視による調査が重要で、加えて、X線、赤外線などを用いた非破壊調査をおこない、外観と内部の情報を知る。それらを総合して修理仕様書を作成して、修理が始まる。

使用されている部材から、当初部材と後補部材を明確に分け、制作当初部分の材質、技法の特徴を調べる。残存部分と後補部材の割合、質を調べ、後補部材内での年代による変化を調べる。これらの調査により、修理の歴史が明確になり、修理履歴が分る。

各部材を調べ、傷んでいる箇所を強化し、形の欠損している箇所は新たに補う。また使える部材は除去しないで使い、新たに補

き換えることもある。

修理は事前の調査から始まる。調査の基本は、目視による調査が重要で、加えて、X線、赤外線などを用いた非破壊調査をおこない、外観と内部の情報を知る。それらを総合して修理仕様書を作成して、修理が始まる。

修理は事前の調査から始まる。調査の基本は、目視による調査が重要で、加えて、X線、赤外線などを用いた非破壊調査をおこない、外観と内部の情報を知る。それらを総合して修理仕様書を作成して、修理が

付けたり、足したりするという、単純な作業と思われているようであるが、それは誤解である。むしろ、その文化財にとって徹底的な健康診断の場であり、同時に情報収集と公開の役目を果たすものであると言える。また新たな発見により從来の歴史が書き換えられることがある。

修理は事前の調査から始まる。調査の基本は、目視による調査が重要で、加えて、X線、赤外線などを用いた非破壊調査をおこない、外観と内部の情報を知る。それらを総合して修理仕様書を作成して、修理が始まる。

修理は事前の調査から始まる。調査の基本は、目視による調査が重要で、加えて、X線、赤外線などを用いた非破壊調査をおこない、外観と内部の情報を知る。それらを総合して修理仕様書を作成して、修理が

修理においては、健全な状態の物に手を加えることは許されないし、傷みが進み、これ以上放置しておけば危険な状況に陥ると判断された初めて修理がされるのであって、修理の時でなければ、情報を得ることは不可能であるという、このように自分で得る生の情報は伝聞とは異なる、まことに貴重な情報収集の機会でもある。

修理とは、新たな発見の場であり、この重要性を多くの方に知って貰いたく展示を準備中である。

（なかさわ・じちろう／文化財保存学科講師
攻教授）

う部分を造り、当初部分を主に組み立てて見る。これに後補部分を加え、新たに造った部材を付け足し、組み上げる。最後に表面を整える作業となる。新たに修理した箇所を周囲に合わせ、違和感がないように整えて完了となる。

こうして得られた新しい知見は、作業を進めるなかで発見されるのであって、外から見るだけの観察とは、得られる情報量に格段の違いがある。

修理においては、健全な状態の物に手を加えることは許されないし、傷みが進み、これ以上放置しておけば危険な状況に陥ると判断された初めて修理がされるのであって、修理の時でなければ、情報を得ることは不可能であるという、このように自分で得る生の情報は伝聞とは異なる、まことに貴重な情報収集の機会でもある。

修理とは、新たな発見の場であり、この重要性を多くの方に知って貰いたく展示を準備中である。

（なかさわ・じちろう／文化財保存学科講師
攻教授）

ヨップ（一〇時から一六時）を行います。

その間、国際陶芸展を、芸大陳列館（十一

月一日から九日）、取手市民ギャラリー「ぎ
らり」（十一月三日から八日）において開催。

十一月十一日から十四日は中部地方（高
遠・美濃・瀬戸）を研修旅行します。学生
教官の陶芸を通じて国際交流の深い絆と、
友情の輪が広がることを期待しています。

（また、ふみお／工芸科陶芸研究室教授）



トルコでの交流。2001年

姉妹校ソウル大学校美術大学との「デザイン交流展

長濱雅彦

展覧会予定

(2003.9～2004.3)

大学美術館本館

名作200余点でたどる「工芸の世紀」 明治の置物から現代のアートまで

10月7日（火）～11月30日（日）

一般1100円 学生700円

特集陳列 赤松麟作没後50周年記念展

12月6日（土）～1月12日（月・祝）

入場料300円

芸大コレクション展 日本画の名品（仮称）

12月6日（土）～1月12日（月・祝）

入場料300円

大藪雅孝退官教官展

1月22日（木）～2月8日（日） 入場無料

第52回卒業・修了制作展

2月21日（土）～2月26日（木） 入場無料

陳列館

建築科椅子展

9月5日（金）～9月15日（月・祝）

入場無料

“私を観る”展

9月18日（木）～10月5日（日） 入場無料

日本画第1研究室研究発表展

10月6日（月）～10月14日（火）

入場無料

NASDA宇宙開発事業団との 共同研究の成果発表

10月15日（水）～10月31日（金）

入場無料

国際陶芸展

11月2日（日）～11月9日（日）

入場無料

“しあわせのデザイン” ソウル大学校交流展

11月11日（火）～11月14日（金）

入場無料

取手館

美術学部取手校地創作展

12月 入場無料

※開館時間は、いずれも10時～17時。月曜日休館。ただし月曜日が祝日の場合、開館することがあります。

※展覧会の名称・会期については、変更することがあります。

※本学には駐車場はありませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。

※展覧会についてのお問い合わせ

東京芸術大学美術館

Tel.03-5685-7755

NTTハローダイヤル

Tel.03-5777-8600

※展覧会の紹介は、下記ウェブサイトでご覧になれます。

<http://www.geidai.ac.jp/museum/>

ここ十数年姉妹校としてソウル、東京を隔てて交流プログラムを実施してきました。平成十四年度、十五年度はデザイン科が担当。昨年十二月にソウルにて、「二十一世紀東アジア「デザインの新しい価値」（オブザーバーとして中国清華大学の教官も参加）と題する交流セミナーと学生ワークショップを行い、東アジアの新しいデザインの流れを相互に認識することができました。

今回はその後半戦。日本、特に東京で暮らすわれわれやデザイナーの卵たちが、いちばん何に飢え、何を求めているか、という視点に立ち、「それじゃ、一度根本に」ということで、“しあわせのデザイン”というテーマに辿りつきました。

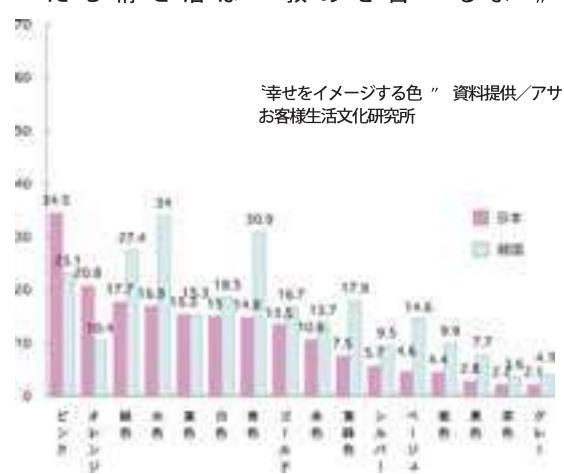
本来、人々の暮らしを豊かにすることが目標であるはずのデザインといつものが、敗戦を境に高度経済成長を支えるものとして役割を与えられ、産業からの視点だけが

最優先されてきました。ただ、ここ数年の経済不況は、皮肉にもデザイン領域のなかにもうひとつの視点、かつてあった士俵の存在をわれわれに伝え、また「革命は、モノの表面から内部（本質）へ」向かうようデザイナーたちに対して手招きしている感があります。

「デザインは産業のためではなく、自分自身がもつと幸せになるために、自分自身をとりまく社会がもつと豊で幸せになるために行うべきである」（河北秀也／デザイン科教授、という仮説が出発点です。）

テーマがテーマだけに曖昧さや甘酸っぱさだけが残らぬよう、アサヒビールの生活文化研究所の協力をいただき、日韓の幸せ報を交え、学生と共に「しあわせを感じる技術」として「デザインを考える機会にしたい」と思います。

（なかはま・まさひこ／デザイン科助教授）



「幸せをイメージする色」 資料提供／アサヒビール（株）
お客様生活文化研究所

秋の奏楽堂 2003.9>>>2004.3

ピアノシリーズー100三 プロコフィエフ没後五〇年

聴き手の心に沁みる叙情

角野 裕

二〇世紀も過去の世紀となつて、早くも三年の歳月が流れていますが、今年は二〇世紀前半のロシアの代表的な作曲家プロコフィエフ没後五〇年の記念の年を迎えていきます。八曲のオペラや七曲のバレエ音楽を始めとして、劇音楽、映画音楽、協奏曲、器楽曲、声楽曲等、極めて多岐にわたる作品を残したプロコフィエフですが、九曲のソナタを始めとして、生涯にわたつて様々なピアノ作品を書き続けたのみならず、自身も名ピアニストとして優れた録音を残しているように、ドビュッシー以降、ピアノに最も比重を置いた作曲家の一人と言えるでしょう。実際、彼は、初めてのアメリカ演奏旅行で、「鋼鉄の腕を持つたピアニスト」と讃えられたのでした。

プロコフィエフの音樂というと、それらが生み出されたおよそ一世紀近く前と同じく、今日でもその鋭角的な響きや攻撃的な曲想が強く印象づけられています。確かに、彼自身、自分の中には「モダニズム」や「モーター」といった要素があることを認めていますし、そのため現在でも、「プロコフイエフは嫌い」と敬遠する向きもあるでしょう。しかし、彼の作品は同時に、精妙な性格描写に長け、現代社会の持つ不安や孤独、その中での人間の悲しみなどをも感じ

させるリリシズムを湛えた旋律を持ち、聴き手の心に沁みる叙情には、格別な味わいがあります。「ピーターと狼」に見られる親しみやすい旋律と登場人物の性格付けの巧さや、「戦争ソナタ」での深く魂を揺さぶる真摯な感情表現を思い起こしていただきだけでも、その一端は伺えるのではないかでしょうか。「叙情性」は彼の中では最も遅くに芽生えた要素ではありましたか、最も深く、又、大きく花開いた要素でもあります。

一九一八年(大正七年)、渡米への道すがら

一時日本にも立ち寄つて、演奏会も行つたことのある偉大な作曲家の節目に当たる本年の秋、音楽学部ピアノ科では、多くの教官と大学院生の協力を得て、九曲のピアノ・ソナタ全曲をはじめ、ピアノのための様々なタイプの独奏曲、バレエ音楽などのオーケストラ作品からピアノ編曲など、彼のピアノの世界を三回にわたり演奏いたします。よく知られた作品はもとより、「その物自体」「四つの小品」「ソナタ第九番」等、普段生演奏では滅多に聞くことのできない曲を数多く含んだこのシリーズは、きっと、あなたを未知のプロコフィエフとの新しい出会いにいざなうことでしょう。

(かぐの・ゆう／音楽学部器楽科助教授)



セルゲイ・プロコフィエフ。1930年代 "SERGEI PROKOFIEV" (STATE PUBLISHERS "MUSIC" MOSCOW, 1965) より

奏楽堂演奏会予定

(2003.9~2004.3)

定期演奏会・特別演奏会予定

9月4日（木）
モーニング・コンサート第10回
(作曲・声楽)

9月11日（木）
モーニング・コンサート第11回
(作曲・ピアノ)

9月18日（木）
芸大21 アジアの協奏曲
～民族楽器とオーケストラによる～

10月10日（金）
芸大定期オペラ第49回 第1日

10月11日（土）
芸大定期オペラ第49回 第2日

10月24日（金）
芸大定期オーケストラ第305回

10月25日（土）
“うた”シリーズⅢ 第2日
スペインと中南米の声楽作品のタベ

10月30日（木）
附属音楽高等学校定期演奏会

11月2日（日）
ピアノシリーズ2003
(プロコフィエフ没後50年)第1回

11月6日（木）
室内楽演奏会V
ハイドン弦楽四重奏曲
全曲演奏シリーズ 第1日

11月7日（金）
室内楽演奏会V
ハイドン弦楽四重奏曲
全曲演奏シリーズ 第2日

11月9日（日）
ORCHESTRA EXPERIMENTS
有賀誠門退官記念公演

11月21日（金）
芸大定期合唱・オーケストラ第306回

11月24日（月・振休）
上野の森音楽むかしばなし
～芝居と音楽のひととき～
第3回 ヘンデル：バッティック
～つぎはぎオペラ～

11月27日（木）
創造の杜2003
～芸大現代音楽のタベ～

11月28日（金）
芸大定期オーケストラ第307回
～学生オーケストラ演奏会～

11月30日（日）
ピアノシリーズ2003
(プロコフィエフ没後50年)第2回

12月1日（月）
芸大定期吹奏楽第69回

12月2日（火）
芸大定期邦楽第67回

12月6日（土）
“うた”シリーズⅢ 第3日
～限りなく広がるアンサンブルの
楽しみ・喜び～

12月14日（日）
ピアノシリーズ2003
(プロコフィエフ没後50年)第3回

2月12日（木）
モーニング・コンサート第12回
(作曲・ピアノ)

2月12日（木）
芸大定期室内楽第30回 第1日

2月13日（金）
芸大定期室内楽第30回 第2日

2月20日（金）
芸大定期チェンバーオーケストラ
第2回

2月22日（日）
楽器シリーズV「和楽器」

3月16日（火）
上野の春～芸大教官演奏会～
第2回

※2003年6月30日現在の予定表です。今
後、演奏会内容、日程などについては、
変更することがあります。

※演奏会の曲目、開演時間などの詳細に
ついては、決定次第、大学ホームページ
で発表します。
<http://www.geidai.ac.jp>

※本学には駐車場はありませんので、お
車でのご来場はご遠慮ください。

※チケットの取り扱い
チケット販売窓口 03-5815-5452 /
東京芸大美術館ミュージアムショ
ップ 03-5685-1176

※上記の演奏会のほか、「学内演奏会」「卒
業演奏会」の日程については、下記に
お問い合わせください。

※演奏会のお問い合わせ先
演奏芸術センター演奏係
03-5685-7700



セルゲイ・プロコフィエフ来日公演パンフレット (1918年)



来日公演がおこなわれた東京・帝国劇場 "SERGEI PROKOFIEV" より

第1日 11月2日(日)

ソナタ第1番 op.1—植田克己／4つの小品 op.4—野田清隆（博士4年）／《思考》より第2曲レント op.62 No.2・《3つのオレンジへの恋》より行進曲とスケルツォ op.33ter・《6つの小品》よりエチュード（バレエ『放蕩息子』）によ
る op.52 No.3—前田健治（修士1年）／ソナタ第9番 op.103—西川秀人／つかの間の幻影 op.22—伊藤恵／ソナタ第6番 op.82—北川暁二

第2日 11月30日(日)

トッカータ op.11・《10の小品》より行進曲、伝説、前奏曲、スケルツォ
op.12 No.1,6,7,10—佐野隆哉（修士1年）／サルカズム op.17・ソナタ第3番 op.28—秦はるひ／ソナタ4番 op.29—平井丈二郎／《シンデレラ》による
6つの小品 op.102—砂原悟／ソナタ第8番 op.84—渡邊健二

第3日 12月14日(日)

4つの練習曲 op.2—木村綾子／ソナタ第2番 op.14—岡田敦子／《その物自体》
より第1曲 op.45—赤井裕美（博士2年）／ソナタ第5番 op.38—沢田千秋（博士2年）／《ロメオとジュリエット》による10の小品 op.75—角野裕／ソナタ
第7番 op.83—田代慎之介

